

# 神様が祭られている?! 島のテラ



天城町内には石を御神体とした**テラ/ティラ**と呼ばれている場所がいくつかあります。しょうじの寺(前野)、馬鞍岳の山寺(浅間)、大和城の山寺(天城)、山テラ(兼久)、テラ(瀬滝)、ビンジルガナシ(当部)、山寺(西阿木名)、ミンジルガナシ(三京)、三京坊主などです。与名間の氏神社にも、御神体だった石が社の裏に鎮座しています。トカラ列島の宝島では墓地を、喜界島では洞穴墓の石棺を、沖縄本島では人骨を神として祀る洞穴を**テラ**と呼びます。奄美や沖縄では狩猟採集時代が長かったため、農耕を営む定住生活になるのは11~12世紀以降(グスク時代)になってから。さらに、琉球王国(琉球国)の成立は15世紀から。徳之島も、琉球王国の一部に組み入れられますが、17世紀初頭に島津氏の琉球への侵攻に伴い、薩摩藩の直轄領とされます。本土や琉球列島など、それぞれの地域には元々、祖先の霊、太陽、石、山、海、自然現象などを祈る信仰がありました。一方、内地でも様々な事物や人、伝説の生物などを祀る『古神道』が広く信じられていましたが、6世紀に仏教が伝わると融合していき、幕末まで神仏習合が続きました。また、江戸時代は社会が安定したため、様々な宗教が交じり合って庶民信仰が多様化し、こんびらさんなどの権現、色々な宗教からの良いとこ取りのような七福神、仏陀の弟子で撫で仏の風習となった『**びんづる**資頭盧』を祀ったりしました。テラは、島の古くからの信仰や聖地に、琉球のノロの祭祀と、江戸時代中期以降の内地の宗教を取り込んで変化してきたようですが、なぜ奄美や沖縄でテラの靈石を**ビンジル**や**ビジュル**と呼ぶようになったかは、未だ謎です。

